

寸 脇

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

第8号 1992.10

目 次

選挙と情報の政治学（水崎節文）	1
より速い情報収集法を求めて（江崎孝行）	3
教官推薦図書	
力学における最近の新しい展開（岡二三生）	6
日本人としての顔（大橋秀法）	6
わが附属図書館の自己点検に向けて	7

平成3年度基本図書購入リスト	15
教官寄贈図書	15
図書館員から一言 中齋二三博	16
羽賀 啓子	16
お知らせ	16

選挙と情報の政治学

水 崎 節 文

国政選挙が行われると連日新聞の活字が躍り、電波メディアでは深夜放送が多くなる。各政党の政策、選挙の争点も勿論重要な部分であるが、投票日が近づくと次第に開票結果の予測にウエイトが絞られてくる。政党や候補者は集票活動以上にこれらの報道に神経をとがらせる。今や有権者は即時的な情報の受け手として敏感に反応することを知っているからである。

「バンドワゴン効果」という言葉がある。これは「勝馬に乗ろうとする心理効果」のことである。有権者は優勢と報道された候補者に投票する傾向があるというものである。コロンビア大学の研究グループが世論調査の測定データから明らかにしたもので、大統領選挙では1964年のジョンソン対ゴールドウォーター、1972年のニクソン対マクガバーンの時に典型的にあらわれたといふ。

劣勢が確実な候補者に投票しても無駄だという心理効果だと説明されるが、逆にいえば当選確実

な候補者にわざわざ投票することも別な意味で無駄なのであって、結果に及ぼす一票の効果からいえば、この場合には投票コストを考えると棄権した方が合理的だということになる。また接戦が予測される選挙ならば、むしろ劣勢な方に投票した方が一票の価値が高いという論理にもなる。日本の選挙では、こちらの方が当てはまっていることは選挙事務関係者が共通に認めていることであって、「アナウンスメント効果」と呼ばれている。選挙の終盤に「××候補有利」と報道されることを、選挙事務所はもっと嫌うのである。

日本の信頼できる全国調査（JABISS 調査 1976, JES 調査 1983）の分析からは、選挙予測報道に触れて棄権したり、投票政党や候補者を変えたりしたことがある有権者は16%強と推測されている。

投票態度の決定には、候補者支持、政党支持、争点選択の3要因があることは政治学の常識であ

る。日本では、選挙の時期によって多少の変動はあるものの、候補者個人に対する支持が投票態度決定要因としては断然強い。いずれの要因で投票態度を決定するにせよ、周囲の状況によってそれを変えたりするのは節操のない行為だとするのが日本人的な政治倫理なのだろう。これらの棄権を含めた有権者の票はよく「浮動票」と呼ばれる。しかし、この「浮動票」は確実に存在し、短期的な政治情勢や情報伝達によって投票行動が変動し、しかも選挙結果を左右する程の大きな威力を発揮していることはどのくらい知られているだろうか。

1970年以降の国政選挙では、投票率が高いと自民党が安定多数を確保し、投票率が低いと与野党伯仲状態になるという一般的な傾向が指摘されている。いわゆる「浮動票効果仮説」である。投票率は、天候、同日選挙、連続する地方選挙疲れなどによっても変動する。国政の行方を決める選挙結果が、気紛れな浮動票によって運命づけられるなどとは、真面目に政党支持や政策点検によって投票を続けている人達には我慢のならないことかも知れない。しかし、政治学者は憤ってばかりはいられない。最近の若者を中心とした政治離れ、政党支持なし層の激増は、それなりに時代を反映したものなのである。そこで、これらの層の投票行動を規定する要因を多因子的に解明することが、政治学、特に政治行動論の分野では重要な仕事になっており、とりわけ伝達される情報とそれに対する反応についての研究は、徐々にではあるが進展をみせているといつてもよい。

最近の研究では、「アナウンスメント効果」を受けやすい層の中に、気紛れではなく、かなり意識的に浮動的投票を行う「バッファー・プレイヤー」が多く存在することが明らかにされている。「バッファー・プレイヤー」とは、筑波大学の蒲島郁夫教授が調査データから析出して名づけた和製英語で、自民党政権の存続を望むけれども自民党安定多数は好ましくなく、与野党伯仲を志向して行動する有権者層のことである。蒲島教授は、バッファー・プレイヤーは、国会における与野党の現在の議席差（現状バッファー）とマスメディアの報道する予想議席差（予想バッファー）の2

つを考慮に入れながら投票行動を行うと推測し、現在の与野党の議席差が大量にある時やマスメディアが自民大勝などと予測すると、他党に乗り換えたり、棄権したりする傾向があると指摘している。（蒲島郁夫『政治参加』東京大学出版会1988）

このような日本人の投票行動の一断面が明らかにされてくると、従来の保守対革新といった政治対決の基軸は、なお存在しながらも、選挙結果を決定づける有力な要因からは遠ざかりつつあるという実感を禁じ得ない。1989年の参議院選挙は社会党・連合に大勝利をもたらしたが、これは革新の勝利などといったものではなく、消費税に反発する生活保守主義と政治倫理を求める国民的良識の中で、バッファー・プレイが過剰に反応したものである。僅か半年後の衆議院選挙で自民党は復元しているし、3年後の今年の参議院選挙では、保革の対決シンボルであったPKOは争点としては殆ど利いていない。

かつてアメリカの経済学者ダウズは、民主主義的政治システムを前提として、有権者は政治に投票することによって得られる自らの期待効用値を測定し、複数政党間でその差を考慮して投票政党を決めたり棄権したりするという「合理的投票仮説」を提唱し、政治学に旋風を巻き起こした。これは近代的合理的有権者という仮説を前提に演绎的に投票行動を類型化したものであり、政治的信条、政治家や政党への忠誠心が強い日本人の投票行動をトータルに説明するには難があるけれども、その中のある部分、そしてかなり規定的な部分、つまりこれまで述べてきた浮動票の独特的行動様式を分析していくには、示唆に富む理論である。しかしそれを検証するのは機能的な手法であり、そのために多方面にわたって調査データやアグリゲート・データを蓄積し、それを有効に処理する多変量解析などの計量分析が試みられているのが、行動論的政治学の現状である。

最近のコンピューターなどの情報処理技術がそれを可能にしているわけだが、若い頃、社会科学に未来社会への構想を短絡的に求めて政治学に飛びついた私としては、「政治学も厄介な時代に来たものだが、急がば廻れだな」というのが素直な実感である。（みずさき ときふみ：教養部教授）

より速い情報収集法を求めて

江崎孝行

図書館に出向いて文献を利用することが少なくなった私は図書館から何か隨筆を書けといわれて正直言って本当に困った。考えだしたあげく図書館への不満を並べ、私がその不満解消のためにこの10年間あまり格闘してきた情報収集の歴史を皆さんに暴露しようと決心した。

私は図書館は文献検索の場と、学習の場としての2つの役割をになっていると思っている。本部の図書館とは異なり、医学部分館では場所が狭く自主学習の場としては不十分である。学生にレポート学習を課すための同じ教育図書を何冊も購入することは許されない。そのため学生の教育にも使いづらい。

米国の大学院で午前と夜（夜10時まで）は授業をうけ、午後と深夜（夜2時まで）は同じ教育図書が何十冊も並んでいる図書館でレポートの作成といった生活を体験し、その充実感を味わってきた私には図書館を有效地に利用できない医学部の学生がかわいそうでならない。

学習の場としての図書館の役割の改善には私個人は何等努力をしてこなかったので愚痴をこのくらいにしておき、失敗だらけの情報収集のための私の格闘の歴史を紹介する。

1980年にパーソナルコンピューター PC 8001が世にでたときは、驚喜して販売店にかけ込んだの

を覚えている。これまで英文の原稿をIBMのタイプライターで苦労して打ち、原稿の校正を24時間以内におこない送り返せと雑誌の編集者から手紙をもらい悲壮な思いで準備し送り返していたからである。

留学時代に米国の研究者がIBMのword processorを使い原稿を打ち、保存し、色々と校正を行っていたのを見て、あれは貧乏な日本の研究室では高嶺の花とあきらめていた。パソコンの販売で同じことが自分にもできるようになったと思ったのである。それまでコンピューターのことはまったく知らず、機械を見たこともなかった私にとってはPC 8001は黄金の剣に思えた。自宅と大学に一台ずつ買い込み、editorの使い方を覚え原稿を書きテープに保存した。2年もたたないうちに次々と新しい機械が登場し editorを使いこなしたころにはword processor プログラムが次々と出現し editorを使う知識は不要となった。

1986年くらいまでに PC 8801, FM-8, FM-16 beta, PC 9801, Macintosh とパソコンの歴史をしているうち大学の整備が進み大型コンピューターを使える環境が整ってきた。外国のデータベースに接続し雑誌到着前のデータを検索し、より早く最新の論文を発表したいという思いと細菌の系統分類に大型計算機が必要になるため大型コンピューターへの接続は不可欠と考えた。

まず医学部の端末と研究室のコンピューターを接続することから始まった。

当初から富士通のコンピューターが納入されておりパソコンも富士通のものなら接続の保証をしますとのことで相談する人もいないまま当時20万ぐらいしたBSC手順のモジュールを購入し8ビット(FM8)の富士通のパソコンで接続を試みた。ここから私の失敗の歴史が始まった。

医学部の端末にすらうまくつながらない。富士通の担当者に文句を言ってもなかなかサービスに



きてもらえない。サービスにくる人はパソコンに関する知識がない。モデムを購入して実際に1年後によくトラブルなく接続できるようになった。本部のコンピューターへの接続もさらに半年近い時間が経過した。接続が出来、喜んでいざ使ってみると専用の端末に比べて耐えがたいくらい処理速度が遅い。リターンを押して画面が出てくるのに数秒かかった。おまけにやたらと回線が切断された。

これでは我慢ができないと富士通の16ビットのパソコンに買いかえたが結果は殆どわらない。モデムは1200bauしか使えないでどうしようもなかった。

そのうち本部から流れてくるニュースに当時流行のPC 8801や32ビットのPC 9801のパソコンをTTYで2400bauで接続できるようになりましたとのニュースが飛び込んできた。

わたしはBSCでの接続に不満が貯まっていた。大型コンピューターの接続に積極的に投資してくれた教授も一向に役に立つデータ処理をしてくれない私に不満が高まっていた。BSCをやめて密かに自費で新しい2400bauのモデムと嫌いなPC 9801系のパソコンを購入し接続を試みた。本部の先生方が開発された接続ソフトを頂き、接続を試みたが一向にうまくゆかない。富士通に連絡すると他社のパソコンの接続には責任を持たせんとの冷たい返事しか帰ってこなかった。

本部の吉田先生や他大学の先生に御協力いただいて、富士通にも文句を言いやすく使えるようになったのは1988年ごろだった。

本部との接続には支障なくなったが次の課題は国内外のデータベースを利用する方法を確立することであった。

学術情報センターがオンラインのサービスをはじめたのは1987年からだったと記憶しているが、学情へは大学間のネットワークを使用して当初から利用でき満足していた。ところが私が最も接続したいDNAや蛋白のデータベースの保有機関への接続は困難を極めた。当初は東京大学にあるDNAのデータベース“NUCDB”を利用した。ところがこのデータベースは一向にデータの更新がなされない。1987年の時点で三島の国立遺伝研究

所のコンピューターのデータは年間4~5回更新されているが、東大のデータベースは更新回数が少なく失望してしまった。

そこで直接データを三島の遺伝研からとる方法を考えた。遺伝研もオンラインのサービスをおこなっていたが文部省のN1ネットワークからの接続はできなかった。UNIXをつかっている大学からの接続は当時可能だったので東大のコンピューターからUNIXに入り込み三島に接続しようとした。接続承認をもらい数カ月後、心踊らせて端末をつないだ。

ところが東大から三島への接続がうまくゆかない。国内のあちこちの専門家に助けてもらしながら原因を探したところ“大学が日立を使っているところはうまくゆくが富士通のコンピューターを使っているところからの接続はうまくゆかない”との冷たい結果が明らかになった。

1988年になって三島の遺伝研は外線電話からの接続サービスを開始したので奮起して電話代がかかることを承知で直接三島に接続してみた。

最初三島の遺伝研のコンピューターのサービスメニューが画面に出てきたときには5年間の希望がやっとかない驚喜した。

ところが接続して使用していると突如回線が切斷される。さらにときには“もしもし”という大学の交換手の声が聞こえてくる。直接研究室から市外電話がかけられないのでトラブルで、外線が必要になった。大学の事務官からは直通電話をひくのはまかりなぬという冷たい返事をもらい途方にくれた。

数カ月後運よく研究室に直通のFAXを引くことが認められたのでここから外線への接続ができるようになった。

また嬉しいことに三島の遺伝研のデータベース(DDBJ)も今年からヨーロッパのEMBLE、米国のGENE BANKとデータを毎日交換するようになり、世界中の最新のデータが登録と同時に毎日見れるようになった。最新データの入手方法は確立したが外線電話での接続はコストが高い。

長い計算をさせると多くの数時間の接続をしていると毎月の電話代の請求が5万円をこすことも珍しくなかった。

そこで何とか大学のネットワークで接続したいと思っていたらこの夏から岐阜大学でも UNIX が使えるようになった。さっそく使用登録をして TELNET で接続を試みたところおおむねうまくゆくことがわかった。まだ回線が切れたり、スピードが遅いという問題があるが電話代が安くなるのはありがたかった。

UNIX が使えるようになって回線を切断したまま back ground job を一晩おこなわせ翌日結果を見ることもできるようになって電話代の心配はまったくなくなった。喜んで一度に複数の計算を走らせ、お叱りをうけたという落ちもあるが長年の問題がこの夏で一気に解消された。

現在は論文の受理の時点でデータベースにデータを登録することを義務づける雑誌が多い。このことは論文の発表前にデータを見ることができるようになったことを意味しており、データベース機関の重要度が増している。

図書館ではハードディスクによる Current contents サービスが数年前から始まり、情報検索

が便利になり、検索スピードがあがった。しかし情報収集は週単位の作業から日単位の作業にかわりつつある。より速い情報収集は研究者にとって極めて重要な作業である。

早く情報を集めたいと願って10年以上経過した。この間に自分の専門分野も固まり、世界中の研究者との交流も深まり、どの研究者と競合しているかがほぼわかるようになってきた。そのおかげで次にどこの研究室からどのような研究ができるかを予測できるようになったため自分のためにデータベースを目を皿のようにして監視する必要はあまりなくなったと思っている。しかし若い研究者にはこれまでの自分の分野を越えた新しい研究テーマを与えなければならない。研究競争の厳しさを味わってもらうためにも常に最新の情報を確保できる体制は維持してゆきたい。

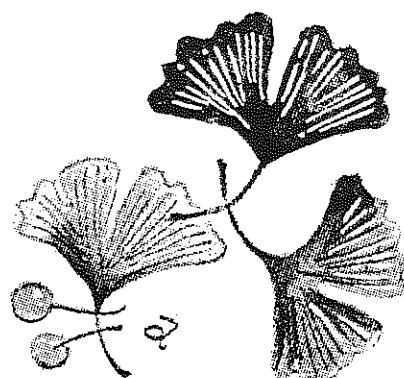
多くの失敗の繰り返しがあったが今年の夏になってこれまでの奮闘が無駄ではなかったと懐かしく思えてしかたがない。

(えざき たかゆき：医学部教授)

オンライン情報検索サービス

図書館では次のオンライン情報検索サービスを行っていますので、ご利用ください。

- JOIS（日本科学技術情報センター）
科学技術を中心としたデータベースがあり、外国の文献も日本語で概要を出力できる。
- STN（日本科学技術情報センター他）
国際的オンラインネットワークで、科学技術を中心としたデータベースがある。
- NACSIS-IR（学術情報センター）
雑誌論文データベースのほかに、図書・雑誌の書誌情報、所在情報も検索できるのが特色である。
- 国文学研究資料館データベース
マイクロ資料目録、和古書目録、国文学論文目録の各データベースがある。
- DIALOG (DIALOG社)
データベースは、あらゆる分野におよび、その数は約400種類におよんでいる。



教官推薦図書

教官から、その専門分野を専攻しようとする学生に先ず薦めたい入門書・基本図書、あるいは、より多くの教官・学生に教養書として是非一読を薦めたい図書を紹介していただいている。

力学における最近の新しい展開

岡 二三生

力学系の分野の新しい展開に関して、2冊の本を選んだ。カオス—新しい科学をつくる（James Gleick著、大貫昌子訳、新潮文庫）、宇宙論への招待（佐藤文隆著、岩波新書）。カオス—新しい科学をつくるーは近年めざましい発展をとげている科学分野であるカオスに関する書である。生物学から工学、物性論まで広い範囲にわたる線形科学の限界を越える非線形科学、決定論的法則と無秩序で不規則な現象を関係づけるカオスの理論の幅広い解説と理論が形成されて行く過程が記述されている。カオス理論の発展は計算機の急速な発達に支えられており、その発展が逆に計算機工学や計算力学の分野にも深くかかわっている。本書が、他書と異なる特徴は理論の解説のみでなく、新しい分野が研究者によっていかに開拓され、またされつつあるかが興味深く描かれている。新しい分

野が形成される場合に既成の枠組みから受ける無理解、反抗、受容と成功のプロセス自体が発展の非線形性を示しているように思える。宇宙論への招待では、ニュートンのプリンピキアとビッグバン宇宙論とを対比させながら物理法則と宇宙と物質存在の関係に新たな焦点をあてている。特に、著者ははじめに法則ありきの発想から、法則、物質と人間の存在を相対化して見直す立場を強調する。巨視的な物質はそこに微視的構造を持つ、その微視的構造には多くの階層がある。たとえば、比較的大きな粒子からなる材料は分子、原子、素粒子さらにそのしたの要素のレベルまで階層を下がることができる。

著書は各階層での法則を豊かにすることを主張している。

(おか ふさお：工学部教授)

日本としての“顔”

大橋秀法

私たちの豊かさの実感として、海外旅行をする人が年毎に増えている。単なる観光や買い物目的の旅行も全く益なしとは言わないが、少しでも異文化に触れ、また他国の人と心の交流を感じるものでありたいものである。語学の力もさることながら日本人としての“顔”が相手の人に見えなければ、心の通り付き合いはできないであろうし相手の心（人間性）も掴み得ないであろう。今の私たち日本人にこのような配慮がもう少しあれば、これまで生じた国際交流における多くの問題は未然に防げたかも知れない。「国際人になることは、自らのアイデンティティを捨てることではない。私は自分が“日本の女”であることを大事にして行動している。」という30年近く外国で仕事をしているファッショングデザイナー森英恵の言葉を何かで見たことがある。我が国の文化的特徴を知

り、それをしっかりと踏まえて行動しないと日本人としての“顔”をもった国際人にはなれないであろう。国際学会の折りに、それぞれの国の国民性と社会の相違について話題にされたことがあり、その話題に堪えられる十分な備えがなくて困惑した経験がある。このような経験は私だけであろうか。このような備えのために、「イギリスと日本—その教育と経済」と「統イギリスと日本—その国民性と社会」森嶋通夫著・岩波新書を一読することを勧める。特に後者を勧める。イギリス人と日本人を比較しながら、日本人の和を保つ術、儒教的思想、年功序列制度、学校教育、見合い結婚、日本の歴史、などについて述べており、「なるほどなるほど」とうなづきながら読み終えることができよう。

(おおはし ひでのり：農学部教授)

わが附属図書館の自己点検に向けて —そのためのアンケート調査（教官対象）結果—

自己点検・評価の実施に当たり図書館は、自己評価検討委員会を開催して、教育・研究活動などにおける図書館情報サービスの現状を正確に把握して点検を行い、その点検結果を踏まえての改善を要する問題点は何か、そして積極的に評価すべき特色と今後の方向等について、評価を行うことにした。

今回は、まず学内の教官に対して、図書館利用に関するアンケートを具体的な事項で、平成4年4月に調査を実施した。アンケートの基本的な内容は、次の項目を骨子として作成した。

- 利用者のニーズに対応しているか
- 大学の教育・研究に即した蔵書構成か
- サービス機能は、心のこもった人と人とのふれあいがあるか
- 研究者サービスを充実させるための学術情報図書館になっているか
- 時代の流れに素早く対応しているか
- 優れた読書環境を維持しているか

調査方法

調査期間	平成4年4月
対象者	全教官 654人
実施方法	配票回収法
有効回収数	346人 (回収率52.9%)
回答者内訳	人文・社会科学系14.2% (49人) 自然科学系 85.8% (297人)

質問と回答 (数字は%)

☆利用状況と利用促進

1. どの程度図書館を利用されていますか。

- | | | | |
|-------|------|---------|------|
| ・ほぼ毎日 | 1.7 | ・週2~3回 | 13.0 |
| ・週1回 | 24.0 | ・2週間に1回 | 20.5 |

- | | | | |
|---------|------|------------|------|
| ・月に1回 | 18.8 | ・年に数回 | 15.3 |
| ・一時期に集中 | 3.5 | ・ほとんど利用しない | 3.2 |

2. 大学教育の中で院生・学生に図書館の利用を促されていますか。

- | | | | |
|------------|------|----------|------|
| ・積極的に促している | 31.2 | ・たまにしている | 54.3 |
| ・していない | 9.8 | ・無回答 | 4.7 |

3. 主にどんな目的で図書館を利用されますか。 (複数回答)

- | | | | |
|-------------|------|---------------|------|
| ・新着雑誌の利用 | 60.4 | ・バックナンバーの利用 | 60.7 |
| ・一般図書の利用 | 22.5 | ・参考図書(辞書類)の利用 | 11.3 |
| ・文献複写申込(館外) | 48.8 | ・情報検索(機械検索) | 26.6 |
| ・その他 | 0.9 | | |

☆目的の達成度(満足度)と蔵書構成

4. 今までに図書館を利用して、目的が達成できましたか。

1) 雑誌は簡単に見つかりましたか。

- | | | | |
|------------|------|-----------|------|
| ・見つかった | 64.2 | ・見つけにくかった | 21.4 |
| ・所蔵していなかった | 19.7 | ・無回答 | 6.4 |

2) 利用したい図書はありましたか。

- | | | | |
|------------|------|-----------|------|
| ・あった | 48.6 | ・見つけにくかった | 18.2 |
| ・所蔵していなかった | 32.1 | ・無回答 | 11.6 |

3) 利用したい参考図書はありましたか。

- | | | | |
|------------|------|-----------|------|
| ・あった | 29.2 | ・あったが古かった | 24.9 |
| ・所蔵していなかった | 27.7 | ・無回答 | 22.5 |

4) 本館の雑誌配架方法(分野別)はどう思われますか。

○新着雑誌

- | | | | |
|------|------|--------|------|
| ・適当 | 71.1 | ・適当でない | 10.1 |
| ・無回答 | 18.8 | | |

○バックナンバー

- | | | | |
|------|------|--------|------|
| ・適当 | 63.3 | ・適当でない | 15.1 |
| ・無回答 | 21.6 | | |

5) 二次資料(索引誌・抄録誌)を使われますか。

• よく使う	14.5	• 時々使う	50.6
• あまり使わない	27.7	• 無回答	7.2
6) 情報検索を利用された方のみお答え下さい。			
• 結果に満足	18.4	• まあまあ満足	70.4
• 満足しない	11.2		

7) コンテンツ・サービスを受けられている方のみお答え下さい。
• 多いに活用 65.9 • あまり活用していない 34.1

☆学術情報システムの利用

5. 次の図書館サービスを御存知ですか。
(複数回答)

• OPAC (岐大図書目録所在情報サービス)	23.7
• 高速ファクシミリによる大学図書館間の文献複写サービス	23.7
• カレント・コンテンツサービス (岐大新着雑誌目次速報)	41.0
• 情報検索 (機械検索) サービス	50.9
• JOIS 24.0 • DIALOG (日本科学技術情報センター) (米国DIALOG社)	7.5
• STN 3.5 • NACSIS-IR (日本科学技術情報センター他) (学術情報センター)	6.6
• CD-ROM 20.8 • 国文学研究資料館 (MEDLINE等)	0.9

6. 次の学外のサービスを研究室から直接利用されていますか。
(複数回答)

• NACSIS-IR 6.1 • NACSIS-MAIL 2.9 (学術情報センター情報検索サービス) (学術情報センター電子メール)
• その他 1.1

7. 今後図書館にどんな学術情報のサービスを期待されますか。
(複数回答)

• 電子メールで行う大学図書館間の複写サービス・現物貸借サービス	45.7
• CD-ROMデータベースの充実とその効果的な提供	28.9
• 岐大雑誌目録所在情報を学内の研究室から検索	25.1
• 新着雑誌の目次を学内の研究室から検索	39.9

• 視聴覚資料・マイクロ資料等の充実	15.3
• その他	1.7

8. あなたの専門は、どちらに該当しますか。
• 人文・社会科学系 14.2 • 自然科学系 85.8

回答の内容

〈利用頻度〉

どの程度図書館を利用されているかについて聞いたところ、「週1回」「2週間に1回」「月に1回」の順で24%, 21%, 19%であった。「ほぼ毎日」「週2~3回」「週1回」を加えた「月に1回」以上の利用者が78%に達している。専門別にみると「月1回」以上で、自然科学系が多かった。(図1)

〈利用促進〉

院生・学生に対して図書館の利用を促されているかについて聞いた。「積極的に促している」31%, 「たまに促している」54%を合わせ86%が促していると回答。専門別では、「積極的に促している」で人文・社会科学系の比率が高かった。方法としては、講義・授業ゼミを通して参考文献の検索、新着雑誌の文献探索、文献収集、レポート作成等で図書館の利用を促しているとしたものが多かった。(図2)

〈利用目的〉

主にどんな目的で図書館を利用されているかについて複数で回答してもらった。最も多かったのは「バックナンバーの利用」で61%, 次いで「新着雑誌の利用」60%, 「文献複写申込」49%, 「情報検索」27%と続く。専門別にみると、人文・社会科学系が「文献複写申込」がトップで、「バックナンバーの利用」、「一般図書の利用」と続くのに対し、自然科学系では「新着雑誌の利用」がトップで「バックナンバーの利用」、「文献複写申込」と続き、利用目的に変化が見られた。(図3)

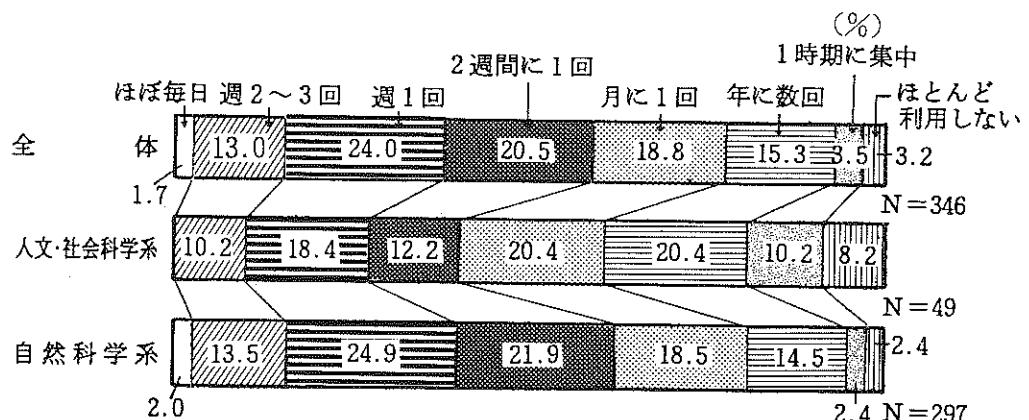


図1 利用頻度

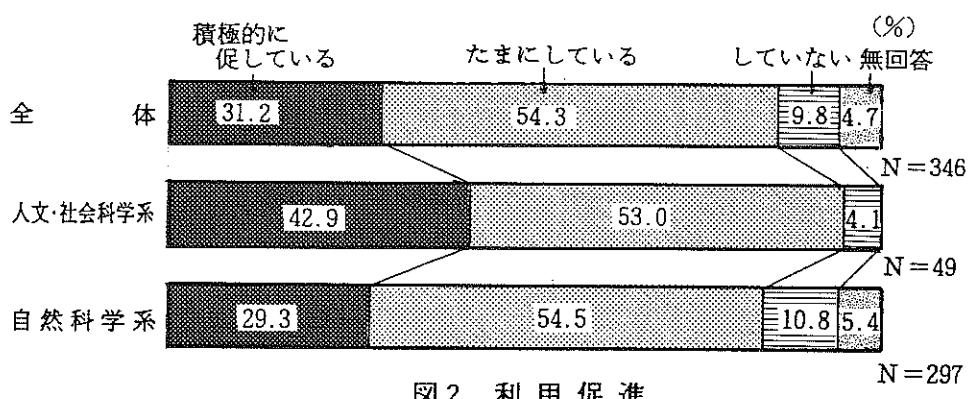


図2 利用促進

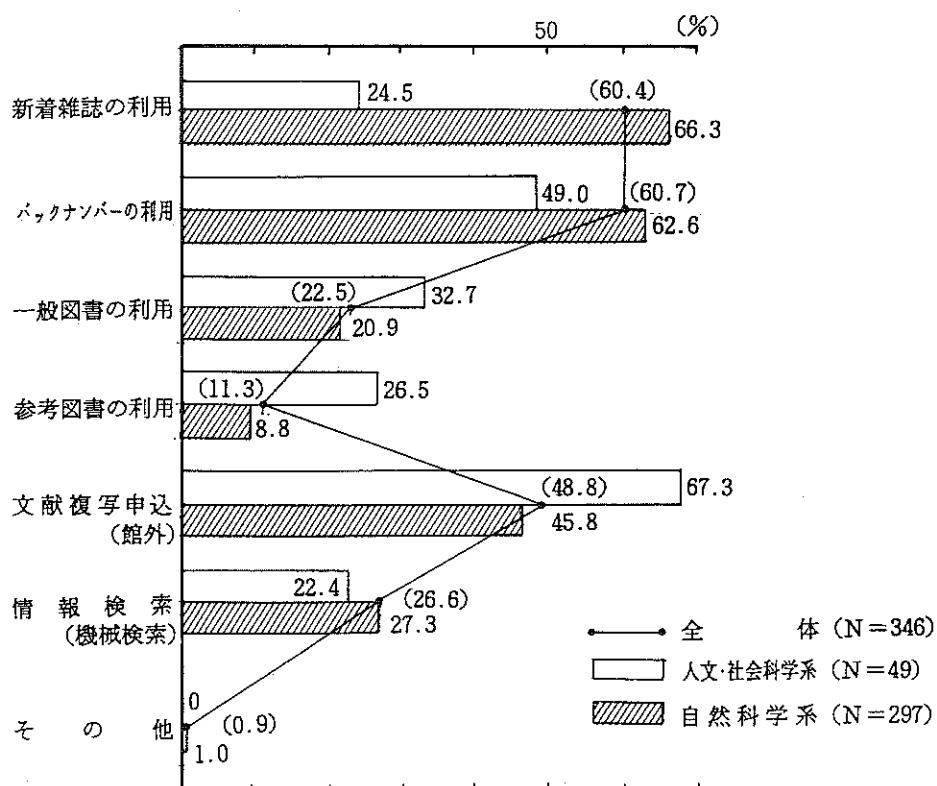


図3 利用目的

〈目的達成〉

今までに図書館を利用して目的が達成できたかどうかを、資料別あるいはサービス別に聞いた。

雑誌では、「見つけにくかった」21%、「所蔵していなかった」20%であった。配架方法、案内等の工夫及び目録等の利用促進が考えられる。

表1 目的達成（雑誌） (%)

	全体	人文・社会科学系	自然科学系
見つかった	64.2	36.7	68.7
見つけにくかった	21.4	30.6	19.9
所蔵していなかった	19.7	24.5	18.9
無回答	6.4	14.3	5.1

図書では、「見つけにくかった」18%、「所蔵していなかった」32%であった。書架案内の工夫、OPACの利用促進が必要と思われる。一方蔵書の整備を進めていく必要があると思われる。

表2 目的達成（図書） (%)

	全体	人文・社会科学系	自然科学系
あった	48.6	32.7	51.2
見つけにくかった	18.2	26.5	16.8
所蔵していなかった	32.1	38.8	31.0
無回答	11.6	8.2	12.1

参考図書では、「あった」29%、「あったが古かった」25%を合わせた「あった」は54%である。一方「所蔵していなかった」が28%であった。蔵書の更新・整備が必要と思われる。

表3 目的達成（参考図書） (%)

	全体	人文・社会科学系	自然科学系
あった	29.2	20.4	30.6
あったが古かった	24.9	18.3	25.9
所蔵していなかった	27.7	38.8	25.9
無回答	22.5	24.5	22.2

本館の雑誌の配架方法（分野別）が適當かどうかについて聞いた。結果は、新着雑誌では71%が「適當」と回答、「適當でない」10%の7倍に上り、8人に7人が「適當である」と回答している。反面「適當でない」と思っている人が8人に1人いることが分かった。バックナンバーでは、「適當」と回答した人が約4倍で、5人に4人が「適當」としているが、「適當でない」と思っている人が5人に1人いることが分かった。新着雑誌にくらべバックナンバーの配架方法に「適當でない」と回答した人が多く見られる。また「適當でない」と回答した人の大多数が、新着雑誌、バックナンバーともに誌名のABC順及び五十音順を希望している。

*この項目は、本館218人（人文・社会科学系48人、自然科学系170人）の集計である。

(図4. 4)

二次資料（索引・抄録誌）がどの程度使われているかを聞いた。「よく使う」15%、「時々使う」51%を合わせた「使う」は65%だった。「あまり使わない」は28%であった。専門別では、人文・社会科学系が「よく使う」で自然科学系より高かった。(図4. 5)

情報検索（機械検索）を利用された方に結果について聞いた。回答のあったのは、人文・社会科学系23人、自然科学系156人、合計179人であった。「満足」18%、「まあまあ満足」70%を合わせた「満足」は88%であった。ただし、満足度は期待感により異なることを考慮する必要がある。専門別ではあまり変化は見られなかった。「満足しない」11%，理由は、アクセスのトラブル、キーワードの不適当、検索方法が面倒、希望出力がない、価格が高い等があった。(図4. 6)

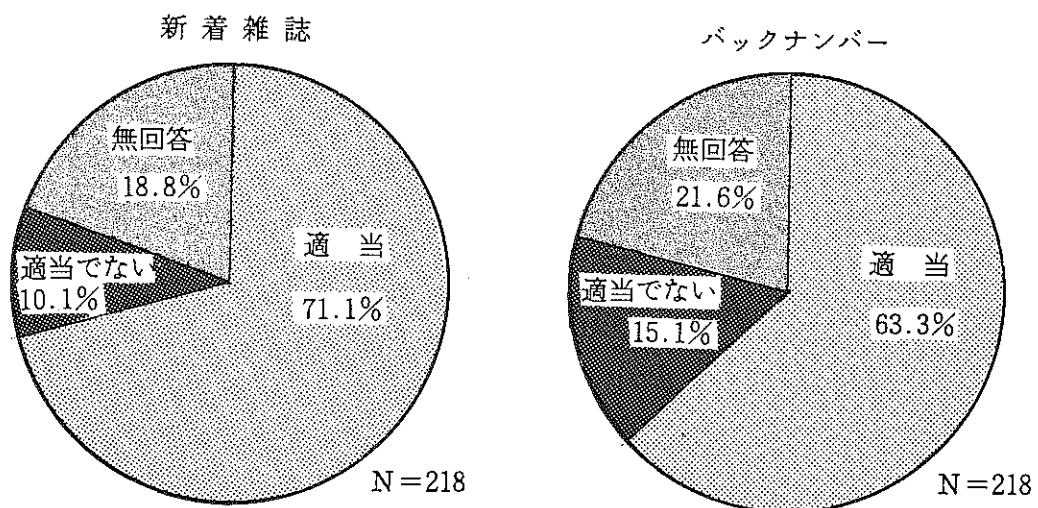


図4.4 雑誌配架方法

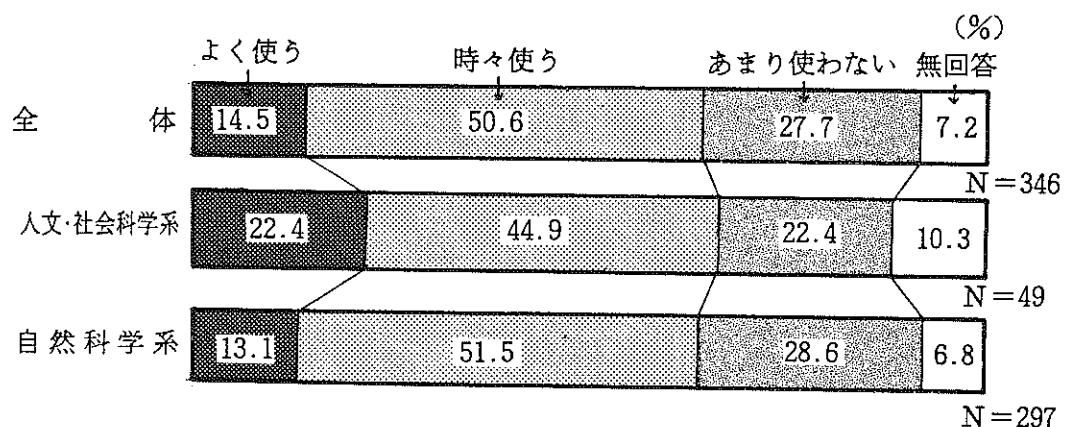


図4.5 二次資料

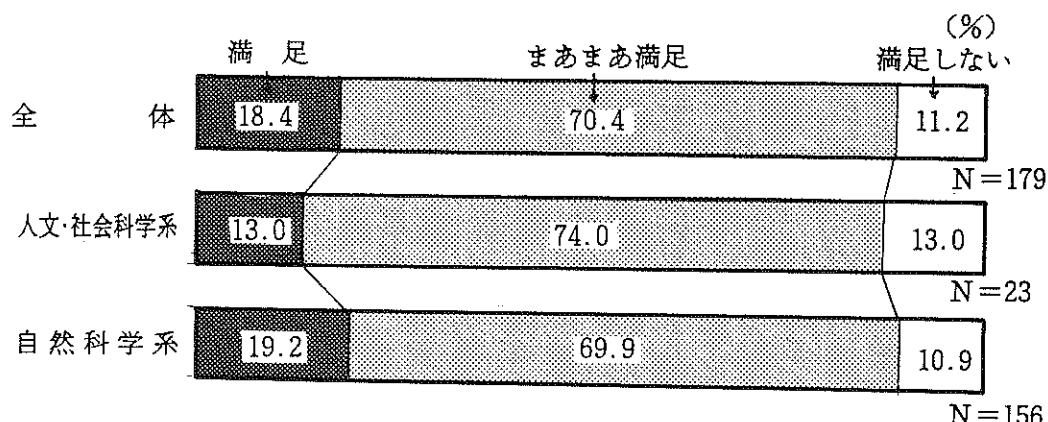


図4.6 情報検索

コンテンツ・サービスを受けられている方に活用の度合いを聞いた。回答のあったのは、人文・社会科学系12人、自然科学系158人、合計170人であった。「あまり活用していない」34%で、「多いに活用」66%の約半分で3人に1人があまり活用していないことが分かった。活用していない理由に、学科に届き回覧のため遅いなどサービスの改善を要するものと、定期的に図書館に行って調べる、他の方法で入手できるので必要ないと意見があった。(図4.7)

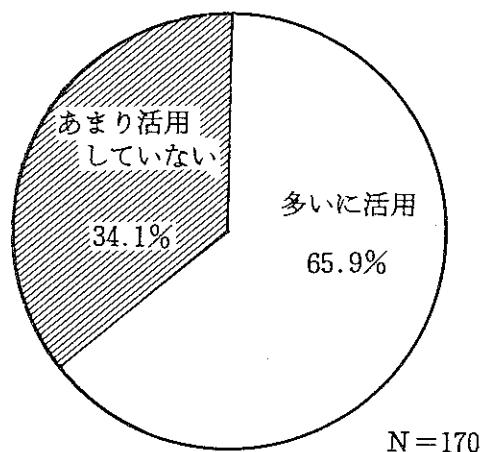


図4.7 コンテンツ・サービス

〈図書館サービス〉

学内の図書館サービスを知っているかどうかをサービス毎に聞いた。トップが「情報検索サービス」51%，次いで「コンテンツ・サービス」41%であった。他のサービスについても25%以下と周知度は低く、図書館サービスの広報が欠けていると考えられる。専門別にみると、各サービス毎に多少比率に違いが見られた。(図5)

〈学外のサービス〉

研究室から直接利用されている学外のサービスを回答してもらった。「NACSIS-IR」6%，「NACSIS-MAIL」3%であった。これ以外に東大NUCDB、三島DDBJ、阪大BIOSIS、東大のCAS、京大のINSPEC等があった。専門別では、人文・社会科学系で2%の人が、自然科学系では11%の人が学外のサービスを直接利用していることが分かった。(図6)

〈学術情報サービスの期待〉

今後、図書館に期待する学術情報サービスを複数回答であげてもらった。トップは、「電子メールで行う複写・現物貸借サービス」が46%で人文・社会科学系、自然科学系ともにトップとなった。次いで「新着雑誌の目次を学内の研究室から検索」40%，「CD-ROMの充実」30%，「雑誌OPAC」25%，「視聴覚資料の充実」15%と続いた。人文・社会科学系と自然科学系で期待するサービスの順位に若干違いがあった。(図7)

〈図書館に対する意見〉

アンケートの終りに、お気付きの点があれば自由に記入していただきました。

基本図書等資料費の充実、各国の新聞の購入、未入力図書の入力、和・洋図書の同一場所への配架、数学関係図書の配架方法、長期貸出、貸出冊数の増加、開館時間の延長、図書館サービスの広報、学内LANの早期実現、JOIS検索後の複写申込の自動化、紙魚・ゴキブリ対策、図書館員の増員等の意見がありました。

図書館では、今回実施したアンケート及び意見を参考に、自己点検、図書館サービスの改善・充実に努力して行きたいと思います。今回のアンケートにご協力いただいた方にお礼申し上げます。

きてもらえない。サービスにくる人はパソコンに関する知識がない。モデムを購入して実際に1年後によくトラブルなく接続できるようになった。本部のコンピューターへの接続もさらに半年近い時間が経過した。接続が出来、喜んでいざ使ってみると専用の端末に比べて耐えがたいくらい処理速度が遅い。リターンを押して画面が出てくるのに数秒かかった。おまけにやたらと回線が切断された。

これでは我慢ができないと富士通の16ビットのパソコンに買いかえたが結果は殆どわらない。モデムは1200bauしか使えないでどうしようもなかった。

そのうち本部から流れてくるニュースに当時流行のPC 8801や32ビットのPC 9801のパソコンをTTYで2400bauで接続できるようになりましたとのニュースが飛び込んできた。

わたしはBSCでの接続に不満が貯まっていた。大型コンピューターの接続に積極的に投資してくれた教授も一向に役に立つデータ処理をしてくれない私に不満が高まっていた。BSCをやめて密かに自費で新しい2400bauのモデムと嫌いなPC 9801系のパソコンを購入し接続を試みた。本部の先生方が開発された接続ソフトを頂き、接続を試みたが一向にうまくゆかない。富士通に連絡すると他社のパソコンの接続には責任を持たせんとの冷たい返事しか帰ってこなかった。

本部の吉田先生や他大学の先生に御協力いただいて、富士通にも文句を言いやすく使えるようになったのは1988年ごろだった。

本部との接続には支障なくなったが次の課題は国内外のデータベースを利用する方法を確立することであった。

学術情報センターがオンラインのサービスをはじめたのは1987年からだったと記憶しているが、学情へは大学間のネットワークを使用して当初から利用でき満足していた。ところが私が最も接続したいDNAや蛋白のデータベースの保有機関への接続は困難を極めた。当初は東京大学にあるDNAのデータベース“NUCDB”を利用した。ところがこのデータベースは一向にデータの更新がなされない。1987年の時点で三島の国立遺伝研究

所のコンピューターのデータは年間4~5回更新されているが、東大のデータベースは更新回数が少なく失望してしまった。

そこで直接データを三島の遺伝研からとる方法を考えた。遺伝研もオンラインのサービスをおこなっていたが文部省のN1ネットワークからの接続はできなかった。UNIXをつかっている大学からの接続は当時可能だったので東大のコンピューターからUNIXに入り込み三島に接続しようとした。接続承認をもらい数カ月後、心踊らせて端末をつないだ。

ところが東大から三島への接続がうまくゆかない。国内のあちこちの専門家に助けてもらしながら原因を探したところ“大学が日立を使っているところはうまくゆくが富士通のコンピューターを使っているところからの接続はうまくゆかない”との冷たい結果が明らかになった。

1988年になって三島の遺伝研は外線電話からの接続サービスを開始したので奮起して電話代がかさむことを承知で直接三島に接続してみた。

最初三島の遺伝研のコンピューターのサービスメニューが画面に出てきたときには5年間の希望がやっとかない驚喜した。

ところが接続して使用していると突如回線が切斷される。さらにときには“もしもし”という大学の交換手の声が聞こえてくる。直接研究室から市外電話がかけられないのでトラブルで、外線が必要になった。大学の事務官からは直通電話をひくのはまかりなぬという冷たい返事をもらい途方にくれた。

数カ月後運よく研究室に直通のFAXを引くことが認められたのでここから外線への接続ができるようになった。

また嬉しいことに三島の遺伝研のデータベース(DDBJ)も今年からヨーロッパのEMBLE、米国のGENE BANKとデータを毎日交換するようになり、世界中の最新のデータが登録と同時に毎日見れるようになった。最新データの入手方法は確立したが外線電話での接続はコストが高い。

長い計算をさせることが多く数時間の接続をしていると毎月の電話代の請求が5万円をこすことも珍しくなかった。

7. 学術情報サービス

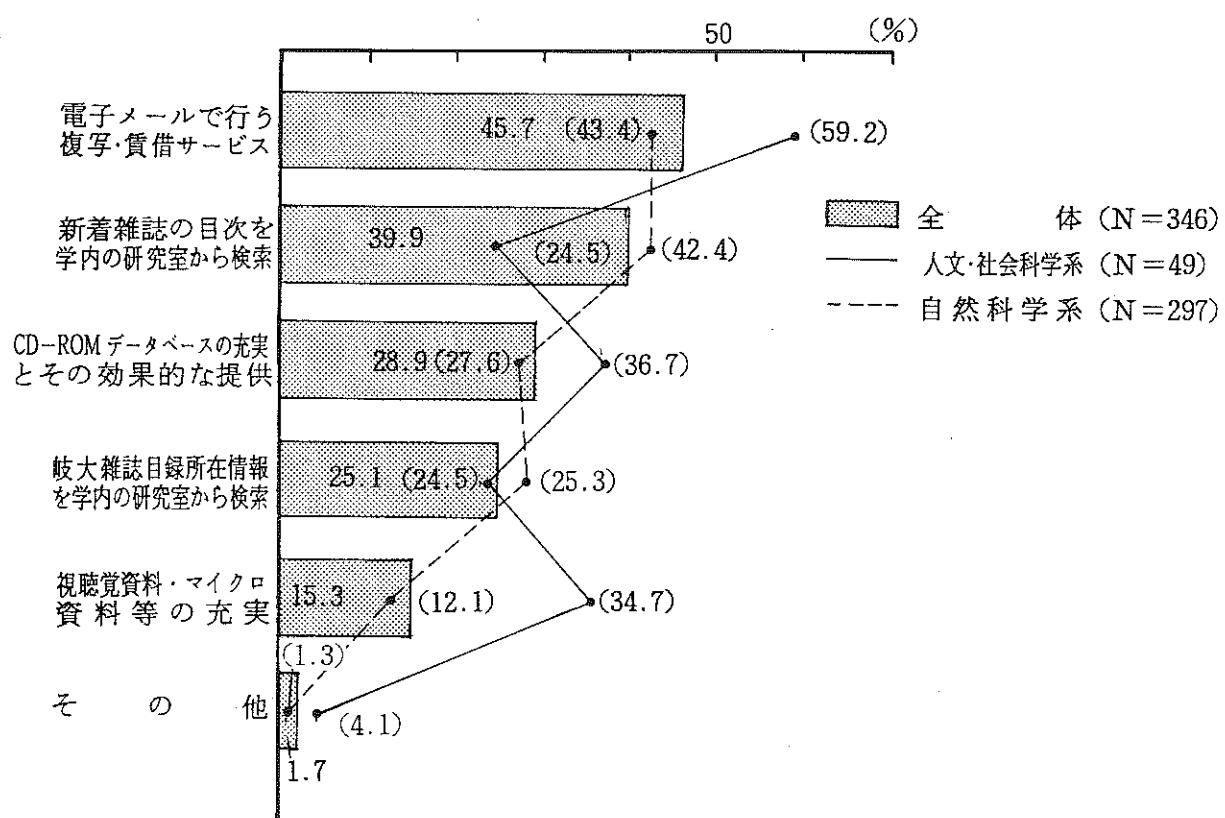
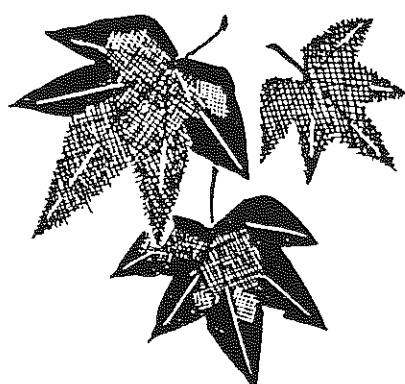


図7 学術情報サービス期待度



平成3年度基本図書購入リスト

資料選定委員会によって選定された下記資料を購入しました。なお、
これらの資料は分類別に備え付けておりますのでご利用ください。

The 19th Century Short Title Catalogue,	本館	人工知能大事典	本館
1816-1870 vols. 9-13		(丸善エンサイクロペディアシリーズ)	
Research Centers Directory 2vols	本館	コンピューターソフトウェア事典	"
The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud. 24 vols.	分館	アクチュエータ実用事典	"
新聞集成 昭和史の証言 全20巻	本館	最新バイオテクノロジー全書 全8巻	"
昭和国勢総覧 全4巻	"	原色野菜病害虫百科 全5巻	"
シリーズ授業(実践の批評と創造) (全10巻・別巻1) ビデオ10本	"	食料・農業問題全集 全20巻	"
Maxillofacial Injuries. 2 vols.	分館	英語による発表と説得—国際会議のために	"
Anesthesia. 2 vols. 3rd ed. 1990	"	SUPREME スプリーム ビデオ・カセット・テキスト	
新生化学実験講座 全20巻	本館	Webster's New International Dictionary of the English Language with Reference History. 3 vols.	"
Comprehensive Medical Chemistry 6 vols.	分館	Webster's New International Dictionary of the English Language. 1947	"
Grzimek's Encyclopedia of Mammals. 5 vols.	本館	新編稀書複製会叢書 全11編	"
量子論(ビデオ) 1セット(15巻)	"		
次世代複合材料技術ハンドブック	"		

教官寄贈図書(平成3年度)

本館所蔵分

ここには学内の教官が著作・編集・刊行等に関係した図書で、図書館に寄贈された分
を掲載しています。御寄贈ありがとうございます。引き続き御寄贈をお願いいたします。

鈴木 正敏(農学部)

微生物の保存 根井外喜男編 東京大学出版会
1977

柳田 洋吉(農学部)

新編宮田用水史 宮田用水土地改良区編
宮田用水土地改良区 1988

堀越 智(教養部)

アイルランド史 上・下 PETER·BERRE-SFORD·ELLIS 堀越智ほか訳 論創社 1991

佐藤 貴裕(教育学部)

国語語彙史の研究 11 国語語彙史研究会編
泉書院 1988

服部 伸(教育学部)

ドイツ統一 G.KNOPP, E.KUHN 小林聰人ほか訳 晃洋書房 1991

御宿 正司(教育学部)

わが青春に食なし はたち会 1991

回帰 高丸もと子詩集 高丸もと子 洛西書院
1991

図書館員から一言

中齋二三博



最近、いろいろな文献検索システムがある。学外の大型計算機に接続して使うものから、パソコンのCD-ROMやハードディスクにデータベースを持つものまで。そして、その中で、検索に使うキーワードの設定がそれぞれ違っている。例えば、漢字のキーワードで検索できても、書名の最初にある単語だけというシステムがある。

できれば、これらの検索システムに「JIS何番」という規格表示を願っている。(なかさい ふみひろ)

羽賀啓子



4月から閲覧係になりました。毎日毎日、目の前を多くの人たちが忙しそうに通り過ぎて行きます。

年月の経過と共に一つずつ「これはこういうことだったのか」と納得しているうちに、世の中は次々と変わっています。新たにわからない事が続発しています。また一つ一つ確かめていくのが楽しい。

時代に流されず、流れに沿って、心身のバランスをじょうずに保って、いきたい。

(はが けいこ)

お 知

ら セ

図書返却ポストの設置について

附属図書館（本館）では、1階玄関前階段下に図書返却ポストを設置します。図書の返却には大変便利になります。読み終えた図書は速やかに返却してください。

新聞閲覧机の設置について

附属図書館（本館）では、このたび現ロッ

カー室を模様替えして、新聞閲覧机を設置しました。一紙ずつゆったりと展示しますので所定の机でご覧ください。

平成4年度の購入図書の受付について

図書館資料、製本の本年度受付は平成5年1月末日をもって締め切らせていただきます。

休館日のご案内 平成5年3月末日まで

次のように休館日を予定しています。

- ・毎月第二火曜日（附属図書館に限り2月は開館）
- ・12月28日（月）～1月5日（火）

附属図書館では次の日も休館日となります。

- ・1月16日（土）大学入試センター試験の日
- ・2月25日（木）個別学力検査の日（前期）
- ・3月12日（金）個別学力検査の日（後期）
- ・3月25日（木）卒業式・学位記授与式の日

次のように夜間開館停止を予定しています。

- ・附属図書館 12月25日（金）～1月8日（金）
3月1日（月）～3月31日（水）
- ・医学部分館 12月25日（金）～1月8日（金）

*図書館内の案内・掲示に注意してください。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第8号 1992年10月31日

編集 委員長：大谷 熊 委員：堀田剛吉、安岡 忠、宇野尚雄、溝口敏博、
中齋二三博、村上喜廣

発行 岐阜大学附属図書館

〒501-11 岐阜市柳戸1番1 ☎0582-30-1111